

『知恵』と『腕前』を獲得するための プラクティス・言語活動

徳島県立城南高等学校 宇山 公暁

1 はじめに

(1) 英語の授業に対するスタンスの共有

オーディエンスに **Mentimeter** を使って 3 つの質問を投げかけ、回答を集約した。(※各問で回答人数が違うのは、ネットワークの接続状況不調の影響のため)

集約結果

Q1: 授業では、生徒を鍛える？生徒に気づかせる？	
鍛える：19人	気づかせる：27人
Q2: Reproduction が大事？「自分のことば」が大事？	
Reproduction：17人	「自分の言葉」：39人
Q3: 授業中英語教師の役割は？ Facilitator? Coach? Performer? Assistant?	
Facilitator：30人	Coach：14人 Performer：5人 Assistant：1人

(2) 発表者の英語授業へのスタンスがどう変遷してきたか

発表者のスタンスの変遷

初任～4年目	PPP よりも TBLT への強い関心、いかに英語で授業をするか、教師は Facilitator である。
5年目～7年目	教えない授業を目指す、「思考・判断・表現」を ICT と共に実践する、教師は Assistant である。
8年目～現在	「思考・判断・表現」の前段階にある力をどのようにして形作るか、「知識・技能」をより実践的な「知恵」と「腕前」に昇華させたい、教師は Coach である。

2 理論的枠組み

(2) 「知識・技能」と「思考・判断・表現」

平成30年告示の高等学校学習指導要領解説において、それぞれ「英語の特徴やきまりに関する事項」を単に知識として理解させるだけでなく、その知識を実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能が身に付くよう指導すること、「外国語で、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に理解したり、これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力」と定義されている。発表者は「知識・技能」と「思考・判断・表

現」の間に存在する領域に着目し、そこに「知恵」と「腕前」という新たな概念を位置づけた。この中間領域にある「知恵」と「腕前」を、意図的に鍛える有意味な活動の設計が発表者の主張の核心にある。

(2) プラクティスと言語活動

どういう活動が知恵と腕前を鍛えることに寄与するのか。発表者はまず授業活動をプラクティスと言語活動に大別し、両者の間に「橋渡し」的活動を設けることを提案したい。まず、プラクティスと言語活動の内容を以下のようにまとめる。

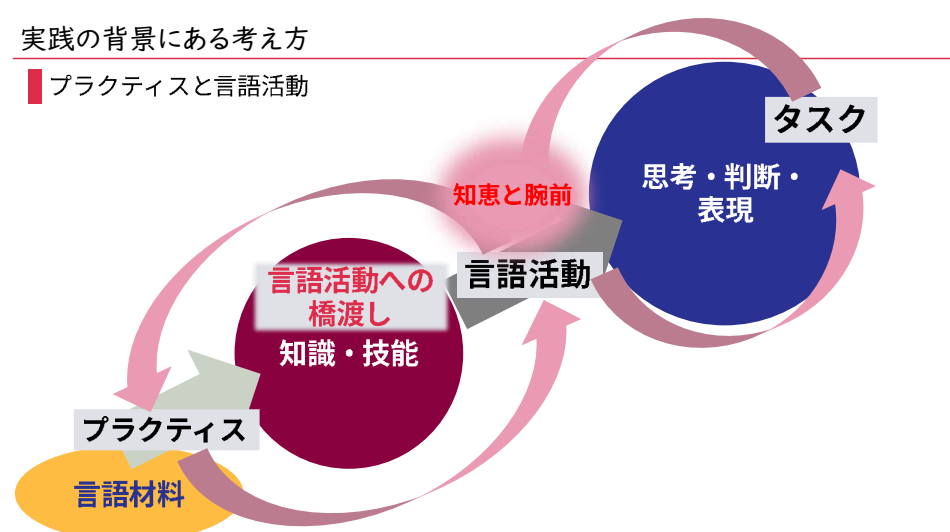
プラクティスと言語活動の概念整理

	プラクティス	言語活動
定義	言語材料の定着を目標とし、十分な反復練習を含む活動。	生徒同士、あるいは想定する聞き手との間で、実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う交流活動。
具体例	英作文の視写トレーニング、スクリプトを用いたスキット、筆写活動など。	即興型のスキット、ディベート、ディスカッションなど。
役割	「知識・技能」を定着させるための基礎訓練。	「思考・判断・表現」の能力を直接的に養う応用活動。

上記の概念整理から、プラクティスから言語活動への隔たりが大きく、「知識・技能」をうまく「思考・判断・表現」に繋げられないという問題点が伺える。発表者の提案として、この間に「言語活動への橋渡し」というステップを設け、この「橋渡し」活動を通して「知識・技能」を「知恵」と「腕前」に昇華させる場としてはどうか。それらを整理したものが以下の図である。

実践の背景にある考え方

■ プラクティスと言語活動



34

発表者の実践は上記の図でいうところの、プラクティスと言語活動への橋渡しを通じて、「知識・技能」を「知恵」と「腕前」に昇華させる過程を具現化したものである。

3 発表者の実践事例

(1) 実践①: Retelling + picture description

教材	CROWN English Communication II Lesson 2 "One Book Can Empower a Child"
ねらい（獲得させたい知恵と腕前）	与えられたピクチャーについてのストーリーを、自分と相手の理解度に合わせて、口頭で伝えるスキル。
活動の内容	教科書の一つのセクションを前後半に分け、ワークシート A/B を用いたペアワークで、各生徒が担当パートのストーリーを相手に口頭で説明する。教師は生徒に対し、「ワークシートの英文を覚えるなら完璧に。不安であれば、相手に分かるように言い換えたほうがよい」と指導する。これにより、単なる暗唱ではなく、伝達を目的とした柔軟な言語運用が促される。
生徒からの反響	「自分で文章の内容をまとめて話せるようになった」「相手に伝わるように簡単な英語表現を考えた」「以前よりスピーキング力が上がった気がした」
分析	単なる反復練習（プラクティス）にとどまらない。言い換えを許容することで、生徒はリアルタイムで自身の言語資源を検索し、文を再構成する必要に迫られる。

(2) 実践②: Negotiation の言語活動

教材	CROWN English Communication II Lesson 3 "Accessible Japan"
ねらい（獲得させたい知恵と腕前）	学んだ内容をもとに、関連する社会問題について口頭でやり取りし、相手の反論を予測しながら交渉するスキル。
活動の内容	「祖谷のかずら橋に車椅子専用通路を整備してほしい」と上司に交渉する、という役割設定でペアワークを行う。最初の数ターンは用意されたスクリプトを読み、途中から即興で対話を続ける。この活動は、当日参加したアメリカ人留学生 2 名を交えて行われ、より本物のコミュニケーションに近い状況が作り出された。
生徒からの反響	「形式的な会話でなく、相手からの質疑に最適な返答を自分の最大の英語力で応用する必要がある」「うまく返答できなかったときに後から『こんな言い回しがあるんだ』と自ら学ぶきっかけになった」
分析	スクリプトから即興へと移行する設計は、学習者に安心感を与える足場かけとして機能しつつ、自律的な言語使用へ挑戦させる構造になっている。

(3) 実践③: 翻訳の言語活動

教材	CROWN English Communication II Lesson 1 "Lost in Translation"
ねらい（獲得させたい知恵と腕前）	中級レベルの英語の物語を、想定する読者（3 歳未満の乳幼児）に合わせて適切な日本語に翻訳して伝えるスキル。

活動の内容	レッスンを通じて「翻訳は等価交換ではない」という言語の相対性を学んだ後、絵本『はらぺこあおむし』の冒頭部分を「3歳未満の乳幼児に伝わるように」という条件で翻訳する。生徒の作品には、「つきがきれいなよるに」（ひらがな主体）や、「ぼかぼかたいようさんがのぼってくると ばき！」（擬音語の活用）など、読者意識を反映した多様な工夫が見られた。
生徒からの反響	「秀逸な翻訳を知り、その真意を学ぶことで今後の翻訳の仕方を考えさせられた」
分析	単語レベルの逐語訳ではなく、読者という明確なコンテキストが設定されることで、言葉の選択や文体に意図を持たせることが生徒に求められる。

(3) 実践④：英文推敲の言語活動

教材	CROWN English Communication I Lesson 4 "Digging into Mystery"
ねらい（獲得させたい知恵と腕前）	既存のプレゼンテーションをより効果的な内容に推敲し、魅力的な導入を作るスキル。
活動の内容	教科書掲載の土偶に関するプレゼン原文を、より魅力的に改作するタスク。まず生成 AI に改作を指示してその限界を認識させた後、上手なプレゼンのポイントを分析し、それを基に生徒自身が推敲を行う。生徒による改作例には、「Do you know dogu?」と聴衆に直接問いかける工夫や、「It is similar to E.T.」のように、未知の概念を聴衆にとって身近なものに喩える工夫が見られた。
分析	生成 AI を「思考の壁打ち相手」として利用しつつも、その出力に鵜呑みにせず、最終的な判断を人間が下すという流れは、批判的思考力を育成する。さらに、何が良いプレゼンかを自ら分析し、言語表現を意識的に操作する過程は、自身の言語使用を客観視する上で重要な役割を果たす。

4 さいごに

発表者が教職10年目に書籍で見た言葉を引用して、発表者が日々意識している英語教育へのスタンスを再確認したい。

「例えば、ICTを活用してSDGsを題材に主体的・対話的で深い学びを展開し、生徒自身が課題を発見し解決していくような授業ができれば、学校での英語教育は成功と言えるのでしょうか。答えは「否」です。「その授業を通じて、生徒は英語ができるようになったか」。この基準がクリアできなければ、「英語の授業」としては失敗だと私は考えます。そのような先進的な授業が悪い、という意味ではありません。ただ、それが「成功」の十分条件ではない、ということです。「英語の授業」の本来的な教育課題は生徒の英語力を高めること。それ以外は「+α」。それが私の基本スタンスです。」

奥住桂，上山晋平，宮崎貴弘，山岡大基『4 達人が語る！至極の英語授業づくり&活動アイデア』
明治図書，(2022) より引用（筆者下線）